

# ヘンリー・ジェイムズのアメリカ 文学への寄与 (その一)

沖 田 一

Henry James (1843—1916) は英米文学に大きい影響をおよぼしている。それはどの程度か、  
どういう径路によってか——そういうことを調べてみたいというのが数年前からの私の念願だ  
った。またごく間接にはあろうが、日本文学にも影響があるのではないか——それも調べて  
みたいと思った。野間宏の「真空地帯」を読んだとき特にそう思った。しかしそれでは広範囲  
にすぎるので、先ずアメリカ文学について調べることにした。

概観してみて、影響のおよんでいる作家としてすぐあげられるのは W. D. Howells, Edith  
Wharton, W. Cather, F. Scott Fitzgerald, W. Faulkner その他 2, 3 の作家だ。Stephen  
Crane (1871—1900) は以前から考えていたが、彼の場合は影響ではなくて並行だという結論に  
達した。彼の *The Red Badge of Courage* (1895) は技巧的に全篇が、一貫して一人の心の乱  
れた兵士の視点で 3 人称で書かれているので、ジェイムズや Conrad との関係を追求してみ  
たが、ジェイムズに関するかぎりでは影響らしいものは見出せなかった。ただある共通点があ  
るということだけで影響と断ずることはできない。さて調べてみようとして最初の方の段階で  
私はつまづいた。それはイーディス・ウォートンの作品を一堂に集めている図書館などはわが  
国では皆無だということがわかったからだ。30冊ほどなければ研究できないのに、国会図書館  
でも 4 冊ほど貯蔵しているにすぎない。それもありふれた作品が大半だ。それで 5 年ほど前か  
ら独力で蒐集をはじめ、近頃ようやく希望冊数だけ集めることができた。欠けているものもあ  
るが、ジェイムズの影響を調べるという点ではほとんど問題にならないだろう。

キャザーでは *The Troll Garden* が入手困難だったが、アメリカから最近写真複写をとり  
よせたので、これで彼女のものは全部揃えることができた。その他の作家は比較的新しい人な  
ので入手にあまり困難はあるまいと思っている。

## I William Dean Howells (1837—1920)

ハウエルズはマーク・トウェインともジェイムズとも親友だった。彼は早くからジェイムズ  
の才能を認めて、アトランティック・マンスリー誌の編集をするようになってから、ジェイム  
ズの作品はほとんど同誌にのせた。ジェイムズも早くからハウエルズの *Italian Journey* (1867)  
を批評して、その中で短編作家としての才能を認めた。<sup>(1)</sup> 二人は互いの作品を読み合って激励し

(1) North American Reviews, CVI (Jan., 1868). *Literary Reviews and Essays* by Henry James.  
Ed. by Albert Mordell. Twayne Publishers, 1957. pp. 198-202.

たし、またジェイムズはハウエルズの注意をバルザックに向けさせたりした。<sup>(2)</sup>ハウエルズは6歳年長だったが、文学の理解や広さではジェイムズの方に一日の長があったようだ。ハウエルズの *A Chance Acquaintance* (1873) はカナダを背景にして、Kitty というアメリカ娘とボストンの名門の青年との恋愛を扱い、青年の方で彼女を独占しすぎて、他人にも紹介しなかったことを自責してまとりかけた縁談を破るという筋だ。ジェイムズはこの女主人公をあまりにも「小なまいきで、出しゃばりすぎ」だと批評した。こういうことがあったので、もとの作品はアトランティック・マンスリー誌に連載されたものだが、書物として出すとき作者はキティーの描写を補正した。<sup>(3)</sup>だから書物になって出たときジェイムズはとても喜こんだ。<sup>(4)</sup>

*A Foregone Conclusion* (1875) ではベニスが背景になり、イタリアの牧師がアメリカ娘 Florida を愛するようになる。しかしそれはイタリア人がアメリカ人の「率直と誠実」とがわからぬための誤解だったという。ジェイムズはこれにも好意ある批評をした。<sup>(5)</sup>彼とハウエルズとは交友上でも著作上でも密接な関係を保っていたため、ジェイムズの *Daisy Miller* (1878) はその愛すべき女主人公をこの *A Chance Acquaintance* に、国際関連を *A Foregone Conclusion* に負っているのではないかという臆測があった。たとえば Clark は *A Chance Acquaintance* の愛らしい活潑な女主人公が暗示になってジェイムズが「デイジー・ミラー」を書いたと想像せられるといっている。<sup>(6)</sup>これは何ともいえないが、暗示を受けたとしても不名誉ではなく、ジェイムズの方がより印象に残る女性を創造したということに変わりはない。

*The Lady of the Aroostook* (1879) は「デイジー・ミラー」より少しおくれて出た。Lydia というアメリカのいなかの女教師がアールスツック号でベニスへ向う。この船にはボストンの誇り高い男 Stanistord も乗っている。彼はリディアをいなか娘だと思って軽蔑している。しかし彼女は実はもの静かな美人なのだが、いなかでくらしていたため表面に出ない。彼は彼女の美と無邪気とにしたいに気がつくようになって結婚するという物語だ。「デイジー・ミラー」と同じように背景がベニスであり、アメリカ娘の無邪気さという点を主題にしている。だからこんどはハウエルズの方がジェイムズから影響を受けたのではないかと思われた。しかし作者は別の方面から影響を受けたのだといい切っているのだから、これにも確証はない。<sup>(7)</sup>

ジェイムズとハウエルズとを関連させて考えるとき忘れてならないことが三つほどある。第一は Thomas Sergeant Perry (1845—1928) という文学者だ (1898—1901 年間慶応義塾大学で英語を教えたこともある)。彼は早くから William James とドイツに遊学し、西欧の作家に注

(2) "Introduction" to *W. D. Howells*. By C. M. Kirk and R. Kirk. American Book Co., 1950. p. lxxvii. 以下 "Introduction" by Kirk と略す。

(3) Ibid, p. lxxvii.

(4) *The Letters of Henry James*. By Percy Lubbock. 1920. Vol. II, p. 34.

(5) "Introduction" by Kirk. p. lxxxii.

(6) "Introduction" to *The Rise of Silas Lapham*. By Harry Hayden Clark. The Modern Lib. p. ix.

(7) "Introduction" by Kirk. p. lxxxii.

日して、帰国してからアトランティック・マンズリー誌にツルゲーネフ、ジョルジュ・サンド、ユーゴーなどについての記事を寄稿し、また *Virgin Soil* をふくむ数種のツルゲーネフのものを英訳した。ペリーのこういう活動は当時のアメリカにツルゲーネフ熱をあふ<sup>(8)</sup>た。そしてジェイムズもハウエルズもこのロシアの作家に傾倒した。ツルゲーネフはロシアの変動期にあって身を国外においた人だ。当時のロシアの男性は人生の進路に当惑し、ために無気力で決断力がなく、意見の統一を欠いた。そして当時のアメリカの青年もだいたいそうだった。ところがロシアの女性の方は落着き、着実に情熱的で力強かった。ツルゲーネフの作品にはそういう男女がしきりに出沒する。これがハウエルズやジェイムズの意識に波及しないはずはない。二人の作品にそういう若い男女がよく出る理由はそういうところにもあるだろう。<sup>(9)</sup>

第二に二人の先駆者として J. W. De Forest (1826—1906) がある。ヨーロッパ各地を旅行した人だけに、強いアメリカ的性格をもったアメリカ人がヨーロッパや船上で出合うという内容の作品を書いている。たとえば *Seacliff* (1859) などだ。これもハウエルズとジェイムズとに影響<sup>(10)</sup>した。第三は当時は文学作品の運命は女性によって決定されたという事実だ。事実デフォーレストの作品は女性に訴えるところがなかったの<sup>(11)</sup>でしだいに顧みられなくなった。以上のような共通の原因や刺戟でハウエルズもジェイムズも女性を優位において作品を書いた。特に後者は元来実行力の乏しい女性的な人だったから特にそうだった。だからどちらがどちらに影響を与えたかということは明言できない実状だ。ただ編集者として常にジェイムズの作品に親しんでいたハウエルズが無意識的にでも影響されなかったとはいえない。

*Indian Summer* (1886)<sup>(12)</sup> はハウエルズの心理的ロマンスの最後のものになる。これより少し前彼は *Henry James, Jr.* という論文を *Century Magazine* (XXV, Nov. 1882) にのせて、それまでのジェイムズの作品を総合的に好意的に批評した。筋よりも性格へ、哲学的注釈よりも関連のある細部へとアメリカの読者の注意を向けた。ハウエルズの関心はすでに心理的ロマンスから社会小説へと向いていて、*The Rise of Silas Lapham* (1885) という一人のアメリカの実業家の興亡を扱ったものを書いているが、こういう事情でもう一度心理的ロマンスを書くことになったのだら<sup>(13)</sup>う。中年のアメリカ人 Colville という人が休暇をとってフローレンスへやってきて、昔から知っている Evalina Bowen に会う。エバリーナは 40 に近い未亡人だ。彼女は友人の Imogene という娘を家においている。イモジーンはコルビルが昔失恋したことを

(8) ハウエルズは *Indian Summer* の中で、T. B. Aldrich は *Marjorie Daw* の中でそれぞれツルゲーネフを話題にしているほどだ。

(9) *New England: Indian Summer 1865-1915*. By Van Wyck Brooks. E. P. Dutton & Co. 1940. pp. 230-6.

(10) Ibid. pp. 239-42.

(11) Ibid. pp. 242-3.

(12) 使用版: New Introduction by William M. Gibson. E. P. Dutton & Co. 1951.

(13) *W. D. Howells*. By C. M. Kirk & R. Kirk. pp. 345-55. に再録してある。

(14) "Introduction" by Kirk. p. lxxxv.

知って同情し、二人の間は婚約するということろへまで発展する。しかし娘の方は若い教師を愛するようになり、コルビルとの不釣り合いな婚約を破棄する。コルビルとても不釣り合いなことには気がついていて、自分の年齢にふさわしいエバリーナと婚約する。

先ずこの作品にはいろいろにジェイムズを思い出させるふしがある。第一にコルビルの視点で全編が統一されている点だ。次に主人公のとらえ方だ。He was no longer young, that was true; but with an ache of old regret he felt that he had not yet lived his life, that his was a baffled destiny, an arrested fate. (p.73) 失恋のいた手で中年まで独身でいて、人生に喪失感をもっている男はジェイムズの作品にいくらでも出てくる。彼の *A Most Extraordinary Case* (1868) の Ferdinand Mason もそういう男だ。第二に作品中にジェイムズが話題にのぼる点だ。

“Oh, call us a passage from a modern novel,” suggested Colville, “if you’re in the romantic mood. One of Mr. James’s.”

“Don’t you think we ought to be rather more of the great world for that? I hardly feel up to Mr. James. I should have said Howells. Only nothing happens in that case!” (p.195) これだけのことではあながちジェイムズの影響とはいえないが、作者がジェイムズを念頭においていたことはたしかだ。最後にいえることはジェイムズと同じように国際的対照を扱っていることだ。

一方 *Indian Summer* はジェイムズの *The Ambassadors* (1903) の発想の胚種になったという人も<sup>(15)</sup>いる。コルビルもストレーザも同じく編集者だ。二人とも昔愛したヨーロッパへやってくる。二人とも愛した女を昔失っている。しかし *The Ambassadors* とハウエルズとの関係では次のことの方が重要だろう。ハウエルズは老後バリーへ行き、ある日 Jonathan Sturges に向って「君はまだ若いから全力をつくして生きたまえ」という趣旨の感想をもらし、これをジェイムズがスタージスから聞いて、それが一種の靈感になってあの作品を書いたことだ。<sup>(16)</sup>

ジェイムズがハウエルズからの暗示で書いたという確証のあるものに *Mora Montravers* (1909) がある。これは後者の *Circle in the Water* を源泉<sup>(17)</sup>にしている。

最後に寄稿者対編集者としての関係を述べたい。ハウエルズは編集者として営業政策上一般の穏健な趣味に合致しなければならなかった。彼は年下の友人のうちにアメリカの題材とともにフランス的異国情緒的性質のある題材があるのを喜こんだ。しかしそれにも限度があるので、清教徒的感情を刺激しないようにジェイムズに注意した。編集主 Fields は副編集主ハウエルズに、ジェイムズの作品には「幸福な結末」をもたない厭世的なものがあるといって注意し、それをおもしろがってハウエルズはジェイムズに伝えた。また後者の散文中のフランス語風にも

(15) “Introduction” by William M. Gibson in *Indian Summer*. E. P. Dutton and Co. 1951.

(16) *The Notebooks of Henry James*, Ed. by F. O. Matthiessen and K. B. Murdock. Oxford University Press, 1947, p. 226, 370-4.

(17) Ibid. pp. 307-10.

反対して、ジェイムズは徐々にそういう語風を除去していった。<sup>(18)</sup> そのことでどうということはなかったようだが、ジェイムズの初期のロマンティックな短編 *Gabrielle de Bergerac* (1869) をハウエルズが雑誌にのせたことは大英断だったといわねばならない。ある家の娘を教えている家庭教師が、その娘を情婦にしてかけ落ちするというフランスの物語だからだ。しかし *The Madonna of the Future* (1873) についてはもんちゃくが起った。ジェイムズは一部分を削除訂正することにやむをえず同意した。彼はそういう小心のハウエルズを実は軽蔑して、それが作家としてのハウエルズの限度だといっただけ<sup>(19)</sup>。しかしこれがハウエルズの耳にはいったかどうかは明らかでない。

しかし一方では上に触れたような事情でハウエルズはジェイムズのスタイルを改良するのに貢献した。<sup>(20)</sup> ジェイムズの方では狭いお上品趣味をもっているハウエルズをそういう趣味から引離そうとしたが、彼の力ではおよばなかった。<sup>(21)</sup> 編集者の方では当時の穏健な趣味から逸脱しないように友人の寄稿家の手綱を引きしめるし、後者の方ではそれを軽蔑して引離そうとした。しかし結果からみて、引離そうとしてもたいして引離すこともできなかった。

こうみてきて私は結論を出そうと思い、ふとエデルの「試練されないジェイムズ」を参照すると、私が思っていることとだいたい同じことを述べている。ただしこまかい例証はあげていない。There was an interplay of influence between the two that in neither case was very significant, since their personalities so markedly differed.<sup>(22)</sup> ハウエルズの方がジェイムズにより多く影響を与えたように見え、そして影響の内容は両者でちがうが、要するに二人の影響は相互的なものだった。

## II Edith Wharton (1862—1937)

Edith Wharton がニューヨークで生れた年には Thoreau が没し、Hawthorne は死の直前にあり、Longfellow はまだ健在だった。彼女は 23 歳のとき Edward Wharton と結婚した。ジェイムズはこのころには *Roderick Hudson* (1876), *The American* (1877), *Daisy Miller* (1878) などを書いた文壇の流行児だった。一方的にはあるが彼女はこのころアメリカでジェイムズに会っている。<sup>(1)</sup>

(18) Henry James, "Mr. and Mrs. James T. Fields." Henry James, *The American Essays*, ed. by Leon Edel. N. Y. 1956. p. 273.

(19) Henry James's "Moral Policeman": William Dean Howells. By Oscar Cargill. *American Literature*, Vol. 29, No. 4 (Jan., 1958). p. 378.

(20) Ibid. p. 381.

(21) Ibid. p. 397.

(22) Henry James, *The Untried Years: 1843-1870*. By Leon Edel. J. B. Lippincott, 1953, p. 271.

(1) 彼女は自叙伝 *A Backward Glance* (1934) の中で、この一方的出合いは 1880 年代おそくなってからだと言っている。しかし James がアメリカへ帰ったのは 1881 年（母の病気のため）と 1882 年（父の病気のため）の両度で、彼女が James に会ったのはこのどちらかだ。だから自叙伝中の記述は彼女の思いちがいだろう。

…… When we first met I was still struck dumb in the presence of greatness, and I had never doubted that Henry James was great, though how great I could not guess till I came to know the man as well as I did his books.<sup>(2)</sup>

次回は 1889 年か翌年ごろベニスで会い、このころから二人とも思い出せないような過程で親密になった。彼女が語るところでは、ほんとうの心の結合とは、二人が同じ調子に調節されたユーモア感とか諷刺感をもっているため、何かを二人で瞥見したとき、視線が両方から照らされる探照燈のように交互に交わされる状態だと。そして彼女とジェイムズとはそういう間がらだったという。<sup>(3)</sup>次に彼女の作品を年代順に調べてみよう。

(1) **The Greater Inclination.** Short Stories. Charles Scribner's Sons, 1899.

8 篇を収めているが、ジェイムズとの関連でとりあげられるのは次の 3 篇だ。これはスクリブナーの編集者 Burlingame と Browell とが彼女の才能を認めて出版してくれた処女短篇集だった。

*The Muse's Tragedy* では他界した詩人を背景にして、彼が生前に書いた書翰が問題になる。そういう主題や、全体にあまり関係のない人物を仲介にして筋を展開させるあたりの手法はジェイムズから学んだものだろう。ジェイムズにもこれに似た *The Aspern Papers* (1888) があり、この中に出る Mrs. Prest がここでは Mrs. Memorall にあたるだろう。

*The Twilight of the God* は短い対話だが、対話だけにジェイムズ調がよく出ている部分がある。ジェイムズの対話ではちゅうちょ、くり返し、未完の文章、相手が不明瞭な発言をしたためこちらが追求して意味を明らかにするという弁証法的進め方などが特徴だ。今 *The Awkward Age* (1899) から引例してみよう。

‘Oh, but when have we talked?’ he sharply interrupted.

This time he had challenged her so straight that it was her own look that strayed, ‘When?’

‘When.’

She hesitated. ‘When haven’t we?’

‘Well, you may have: if that’s what you call talking — never saying a word. But I haven’t. I’ve only to do, at any rate, in the way of reasons, with my own.’

‘And yours too then remain? Because, you know,’ the girl pursued, ‘I am like that.’

‘Like what?’

‘Like what he thinks.’ (Book X: NANDA)

これと *The Twilight of the God* の中の次の対話とを比較するとよい。これは Nevius がすでに引用しているので、私は他の例を探してみたが、やはりこれがもっとも適切なので引用<sup>(4)</sup>

(2) *A Backward Glance*, p. 171. (3) *Ibid.*, p. 173.

(4) *Edith Wharton: A Study of her Fiction*. By Blake Nevius. University of California Press. 1953.

する。

Oberville. “……You see I can only excuse myself by saying something inexcusable.”

Isabel (*deliberately*). “Not inexcusable.”

Oberville. “Not ——?”

Isabel. “I had remembered.”

Oberville. “Isabel!”

Isabel. “But now ——”

Oberville. “Ah, give me a moment before you unsay it!”

彼女が初期の作品でジェイムズの反響だといわれたのはこういう点だろう。

*The Portrait* では肖像画家の内面滲透力を扱う。ジェイムズも肖像画家の洞察力や暴露から生じる道德問題に興味をもって *The Liar* (1888) というような短篇を書いた。ジェイムズの読者ならこの二つの作品の近似性にすぐ気がつくだろう。もっとも夫人の場合ではモデルの内面悪を故意に描かないが、ジェイムズでは暴露するという点がちがうだけだ。

(2) **Touchstone.** (英国版 **The Gift of the Grave**) Novelette. Charles Scribner's Sons, 1900.

ここでもまた他界した作家の文学的遺物である書翰が扱われる。Mrs. Aubyn は高名な女流作家だ。未亡人になってから Glennard を愛するようになって、彼に山のような愛の手紙を書き送った。夫人の情熱は報いられないままに他界した。グレナードは夫人の死後彼女の手紙を出版して Alexa との結婚資金にした。彼はそのことを妻にひた隠しにしていたが、アレクサは夫の態度からとうに真相を見抜いていた。彼はオーバイン夫人からすべてを奪い、夫人を欺したといってなげき後悔する。しかし妻の考え方はちがっていた。

“It isn't that she's given *me* to you —— it is that she's given you to yourself.”  
(p.368)

つまりグレナードがオーバイン夫人のために贖罪しようと誓ったその心構え——その心構えこそ夫人の彼に対する贈物で、そういう男性こそ夫人が愛した男性だという。手紙が道德的中心になるという主題ではジェイムズに超自然的物語 *Sir Dominick Ferrand* (1892) がある。ジェイムズでは手紙は利用されないが、ウォートン夫人では利用されるという点だけがちがう。またジェイムズの *The Middle Years* (1893) などにみるように、ある契機で急に高い自覚の段階に達し、自覚させる方の側は常に女性だということが起る。ウォートン夫人のこの作品の最後はそれに近いものだろう。男性はいつでも迷える羊で、女性がその導き手だというのがジェイムズについて離れない考え方だ。ウォートン夫人だったらその反対の場合を書いてもよさそうに思えるのに、そうはしなかった。ただしこれは前のハウエルズの節で述べたような当時の風潮だったのかもしれない。さらにこの作品は novel と short story との中間形式の novelle だが、これもジェイムズが愛用した形式だった。

(3) **Crucial Instances.** Short Stories. Charles Scribner's Sons, 1901.

7 篇が収めてあるが、このうちジェイムズとの関連で考えられるのは次の 3 篇だろう。

“Copy” ではまたしても芸術家の男女が現われる。ジェイムズは芸術は俗物の介入すべき世界ではないとお高くとまっていたようだが、ウォートン夫人でもそれはいえる。未亡人 Mrs. Dale と Ventnor は昔の愛人同志で、互いにやりとりした手紙をもっている。今互いに返してくれと主張するが、最後に昔二人でよく行った庭のことを思い出す。二人にとっては神聖な場所だが、今は公園になって俗化している。それと同じようにお互いの手紙は二人にとって貴重だが、これが俗物の手落到ちて公園化するのを恐れて二人で焼き捨てる。これもある覚醒の段階に達したのだ。

*The Recovery* では Keniston というアメリカの田舎に住む画家が主人公だ。彼はその地では高名だ。田舎娘 Claudia は絵が好きでもあり彼の名声にも惹かれて彼と結婚するが、けっきょく彼が井戸の中の蛙にすぎないことがわかってくる。画家を主人公にするとか、アメリカの地方的劣等にあざむくというようなことは特にジェイムズ的で、*The Ambassadors* (1903) をもち出さなくとも、初期の書翰体の短篇 *The Point of View* (1882) にもそれは現われている。彼自身アメリカを芸術的荒地と認めたらこそヨーロッパへ移住したのだ。

*The Moving Finger*. 肖像画家 Claydon は Grancy の依頼でグランシー夫人の肖像をかいた。クレイドンは夫人を秘かに愛しているため傑作が生れた。やがて夫人は亡くなる。グランシーは年をとるにつれて幸福や辛苦をともにした妻の肖像だけが若いままなのに堪えられないうで、クレイドンに依頼してともに年をとるように年齢の修正をしてもらった。彼が病気になって重態だったとき、夫人の肖像は不吉な顔をした。彼が回復しそうになったとき夫人の顔は絶望的だった。彼はこうして他界する。最後に話者がクレイドンに会ったとき彼は罪を告白した。肖像の修正を任せられたのをよいことにしてつごうのよいように変えたのだ。そしてグランシーの死を早めた。クレイドンは相手の死後指定遺言執行人になったのを好機として肖像をもらい受け、以前の修正をすべてもとへもどして若い夫人を再現し、今こそ自分のものだと呼んだ。この短篇は先ず話者が観察し、次に話者がグランシーから妻の肖像を修正せねばならぬという説明を聞き、最後にクレイドンの話を聞くというようになっている。こういう手法はジェイムズ的だろう。また画家と取材との関係の問題もジェイムズらしく、また肖像に一種の超自然力を与えたり、肖像を異性の代用物とみたりするのもジェイムズ的だ。彼の *The Tone of Time* (1900) などを読めば類似に驚くだろう。ジェイムズは *The Moving Finger* (下の書翰の中では誤って *The Vanished Hand* と書いているが) を読んで次のように Mary Cadwalder Jones に書き送っている。

If a work of imagination, of fiction, interests me at all (and very few, alas, do!) I always want to write it over in my own way, handle the subject from my own sense of it. That I always find a pleasure in, and I found it extremely in the “Vanished Hand” — over which I should have liked, at several points, to contend with her.<sup>(5)</sup>

これをもってみてもジェイムズ好みの作品だということがわかる。



(4) **The Valley of Decision.** Novel. Charles Scribner's Sons, 1902.

18世紀の変動期のイタリーを扱った歴史小説。作者はこの国の歴史地誌に詳しいためイタリー旅行記のような印象を与えないでもない。一つにはジェイムズの影響から離れようとした努力かもしれないが、成功作ではない。ジェイムズは上記の書翰の中でこの作品について感想を述べている。

…… though the “Valley” is, for significance of ability, several pegs above either, I had extracted food for criticism from both …… Only they've made me again, as I hinted to you other things had, want to get hold of the little lady and pump the pure essence of my wisdom and experience into her. She *must* be tethered in native pastures, even if it reduces her to a backyard in New York.<sup>(6)</sup>

この書翰の内容はさっそく作者に伝えられたにちがいない、ジェイムズの忠告にしたがってこれ以後作者は歴史小説に手をつけなかった。

(5) **Sauctuary.** Novel. Charles Scribner's Sons, 1903.

むすこの弱い性格を直そうとする母親の物語だが、作品としては失敗作だ。ジェイムズには病的なまでに他を意識しすぎたり、微細な感じの変化にも鋭敏だが、この作品にはそういう傾向が強い。彼女が彼の反響だといわれるのはこういう点にもある。この作品には次のような箇所がいくらかもある。

Her nature answered to the finest vibrations. (p.4)

She had a sense of walking along a narrow ledge of consciousness above a sheer hallucinating depth into which she dared not look. (p.19)

…… though his egoism was clothed in the finest feelers, he did not suspect a similar surface in others. (p.57)

第二例などは Jamesian imagery の代表的なものだろう。

(6) **The Descent of Man and Other Stories.** Short Stories. Charles Scribner's Sons, 1904.

このあたりで作者はしだいに冗舌で諷刺的になる。彼女は元来諷刺的なのだが(ジェイムズにも大いにその傾向がある)、作者の諷刺は個人的なものから社会的なものにおよぶようになる。これには9つの短篇をふくむが、ジェイムズとの関連で考えられるのは *The Lady's Bell* だ。他界した小間使の亡霊が病身の女主人を守るという超自然ものだ。これとてジェイムズの *The Turn of the Screw* (1898) の影響がないとはいえない。二作品とも背景は淋しい田舎の邸宅で、若い女性を中心に据える。ジェイムズの場合では私見によると、孤独と不安と嫉妬とが若い

(5) *Letters of Henry James*, ed. by Percy Lubbock (1920), Vol. I, pp. 395-396. Letter of Aug. 20, 1902.

以下 *Letters* と略す。

(6) *Ibid.*, p. 396.

女家庭教師に亡くなった前任者たちの亡霊を見せるのだが、作者の技巧で女家庭教師の幻覚と  
もとれるように書いてある。ウォートン夫人の場合でも一人称で語るのだから、客観性という  
点では保証できないというふくみもあるが、ジェイムズほどの無気味さを与えないのも事実だ。

ジェイムズはこのごろ *The Wings of the Dove* (1902) や *The Golden Bowl* (1904) を書  
いていた。彼女の自叙伝によると、こういう作品には深い道德美は認めるが、滋養になる人間  
的空氣が稀薄で、とうていついてゆけないという。また次のようにも述べている。

I was naturally much interested in James's technical theories and experiments,  
though I thought, and still think, that he tended to sacrifice to them that spontaneity  
which is the life of fiction. Everything, in the latest novels, had to be fitted into  
predestined design, and design, in his strict geometrical sense, is to me one of the  
least important things in fiction.<sup>(8)</sup>

しかしこれはのちになってからの思い出で、当時としてはジェイムズの影響は呪縛のような  
ものだった。

(7) *The House of Mirth*.<sup>(9)</sup> Novel.

ニューヨークの粗雑で貪慾な上流社会を背景にして、物質的な貧しい娘 Lily がその社会に  
はいりこもうとして失敗する物語だ。リリーが物質的なのは直接には彼女の母親に責任がある。  
つまり The child is father of the man. という主題なのだ。リリーはこういう娘だったが、  
最後まで純真だったという点で *Daisy Miller* (1878) と比べる人があるが、<sup>(10)</sup>そこまで類似を  
求めるのは少し残酷なようだ。さて Selden はリリーが愛している男だ。次のような会話がは  
じまる。

"Do you want to marry me?" she asked.

He broke into a laugh. "No, I don't want to — but perhaps I should if you did!"

"That's what I told you — you've so sure of me that you can amuse yourself  
with experiments." She drew back the hand he had regained, and sat looking down  
on him sadly.

"I am not making experiments," he returned. "Or if I am, it is not on you but on  
myself. I don't know what effect they are going to have on me — but if marrying  
you is one of them, I will take the risk." (p.73)

こうしてセルデンはいわば間接に求婚し、リリーも間接に承諾するわけだが、こういう考え  
方はジェイムズを思わせる。さらに次の比喩的描写はさらにジェイムズ的だ。

(7) *A Backward Glance*, p. 190.

(8) *Ibid.* p. 190.

(9) 使用版: *The House of Mirth*. With a Foreword by Marcia Davenport. Charles Scribner's  
Sons. 1956.

(10) *Recent American Literature*. By Donald Heiney. 1959. p. 75.

They stood silent for a while after this, smiling at each other like adventurous children who have climbed to a forbidden height from which they discover a new world. The actual world at their feet was veiling itself in dimness, and across the valley a clear moon rose in the denser blue. (p.73)

ジェイムズには断崖や高みに登ったときの危険感が執拗につきまとい、そのため *The Beast in the Jungle* (1903) のような作品を書くことになったのだ。

私の使用した版にはしがきを書いた Marcia Davenport は、はしがきの中で (p.vi) セルデンとジェイムズの *The Awkward Age* の中に出てくる Vanderbank とを比べ、二人とも利己的な臆病で、えたいの知れない女性を敬遠するという点で似ているのは興味深いと書いている。しかしセルデンがリリーを敬遠しているのは Davenport がいうように単なる臆病からではない。彼は spectator (p.4) としてリリーに興味があるのだ。のち彼はモンテカルロでまた彼女に会うが、そのときにいただいた興味も傍観者としての興味だった。…… he began to feel the renewed zest of spectatorship that is the solace of those who take an objective interest in life. (pp. 183—4) そして人生を客観視するところから容易に結婚しないのだ。これはジェイムズの観察者なのだ。まただれのことについても何でも知りたがっている Simon Rosedale という男が出る。こういう人物を設定して物語を展開させるのはきわめてジェイムズ的だ。

(8) **Madame de Treymes.** Novelette,<sup>(1)</sup> 1907.

単純なアメリカ人が、パリへ行って昔馴染みのアメリカ婦人 Fanny (すでにフランスの貴族と結婚して15年になる) に会い、彼女に離婚して自分と結婚してくれというのだが、パリの風俗習慣を知らないため翻弄されて当惑するという物語だ。単純なアメリカ人が複雑なフランスを眺めるときの当惑感を出すためだと思われるが、文体が緻密で濃厚で、後期のジェイムズの文体を思わせる。これはアメリカ対ヨーロッパの主題で、彼が開拓した得意の場面だ。*Roderick Hudson* (1876), *The American* (1877) などはそういう作品だ。この後者の主人公 Newman はアメリカの裕福な実業家で、妻を探しにパリへ行き、貴族の若い未亡人を知って婚約にまでこぎつけるが、わけがわからないままに投げ出されてしまう。相手が金に困っている貴族だったり、主人公が最初歓迎されるのは金のためだったり、彼がフランス人の風俗習慣に無知だったりするところはウォートン夫人のこの作品に酷似している。ただジェイムズの場合ではアメリカ人が15年もヨーロッパにいれば、いわゆるヨーロッパ的病毒 (European virus) に感染して変質する。ここに出るファニーも変質することは変質する。The influences that had lowered her voice, regulated her gestures, toned her down to harmony with the warm dim background of a long social past — these influences had lent to her natural fineness of perception a command of expression adapted to complex conditions.

(1) 使用版: *An Edith Wharton Treasury*. Edited and with an Introduction by Arthur Hobson Quinn. Appleton-Century-Crofts, Inc. 1950.

(p. 409) これは病毒の感染ではなくて洗練されただけのもので、この点はジェイムズとはちがう。

(9) **The Fruit of the Tree.** Novel. Charles Scribner's Sons, 1907.

Amherst はある工場の監督補で労働問題に関心があり、労務者の悲惨な状態を救ってやりたいと思っている。工場の実権を握る未亡人の Bessy は彼に好意をよせて結婚する。しかし労務者に夫ほど同情はなく、そこから紛糾が起る物語だ。あまりにジェイムズらしい *Madame de Treymes* を書いたため、こんどは主体性にとりもどそうと意識しすぎた結果かもしれないが、凡作だ。ジェイムズの特徴的な描写法の一つに交互に立場を変える方法がある。たとえば *What Masie Knew* (1897) の中で、ある気まずいことがあって Sir Claude と幼女のメイジーとがだまって対面する場面がある。そのときメイジーの意識は次のように流れる。

…… if he had an idea at the back of his head she had also one in a recess as deep, and for a time, while they sat together, there was an extraordinary mute passage between her vision of this vision of his, his vision of her vision, and her vision of his vision of her vision. (XIX)

さて *The Fruit of the Tree* の Book III に、アマーストがベシーと別れるつもりで家を出るが、Justine (ベシーの友だちで、ベシーの家にて幼い娘の世話をしている) にすすめられて帰宅する。帰宅してみると妻は Mrs. Carbury という人のところへ行っていていない。そのことをベシーとジャスティンとが問題にする場面がある。

At length Justine said: "Did Mr. Amherst know that you knew he was coming back before you left for Mrs. Carbury's?"

Bessy feigned to meditate the question. "Did he know that I knew that he knew?" she mocked. "Yes — I suppose so — he must have known." (pp. 352—353)

ジェイムズの影響が少しでもみえるのはこんな些細な点だけだ。

ジェイムズはこのころ雑誌社からウォートン夫人の人物評を頼まれて筆をとろうとし、最近作の *The Fruit of the Tree* を読んでからにしようと思い、そのことを彼女に書き送った。すると彼女はさっそくこの作品を送った。そのときの気持をこう書いている。

He says he wishes to say a few mild words on the mystery of my genius — which looks to me as if he meant to make mince-meat of me.<sup>(12)</sup>

彼は儀礼上一応この作品をほめた次のような礼状を出した。I have read *The Fruit* meanwhile with acute appreciation — the liveliest admiration and sympathy.<sup>(13)</sup> しかし同じ手紙の中でまたこうも書いている。

The element of good writing in it is enormous — I perpetually catch you at

(12) *Edith Wharton and Henry James.* By Millicent Bell. PMLA, Dec. 1959. p. 623. この中には E. Wharton の未発表の手紙が多く収めてあって非常に参考になった。以下 PMLA と略す。

(13) *Ibid.*, P. 629.

writing admirably (though I do think here, somehow of George Eliotizing a little more frankly than ever yet ……)

しかし彼の批評をはっきりさせるのは彼が Mrs. Jones に出した手紙で、ここでは非難している。そしてこれが本音だろう。

But it [The Fruit of the Tree] is of a strangely infirm composition and construction — as if she hadn't taken thought for that, and two or three persons here who have read my copy find it a 'disappointment' after the H. of M. [The House of Mirth]. That is not my sense — I find it superior — and I think the admirers of the 'House' will stultify themselves if they don't at least equally back it up.<sup>(14)</sup>

(10) **The Hermit and the Wild Woman and Other Stories.** Short Stories. Charles Scribner's Sons, 1908.

短篇を7篇収めていて、このうちで問題になるのは次の2篇だ。

*The Last Asset.* アメリカ人 Mrs. Newell は事業に失敗した夫と別れてパリーに住んでいる。娘 Hermy がフランスの貴族と縁組みすることになったので、行方不明の夫を探し出して婚礼の席に出てもらう。彼は妻の運命の最後の財産として役に立ち、虚栄心の強い妻の道具だったことを意識する。以上のことがアメリカ新聞のロンドン駐在の通信員をしている Garnett を介在して眺められる。これはジェイムズの技巧だ。女性の方が男性よりも物質的に盲目になりがちで、そのことはジェイムズもよくとり上げる。 *Louisa Pallant* (1888) などは好例だ。ニューウェル夫人もそういう女性だが、これはあながちジェイムズにあやかったとはいいい切れないだろう。それよりも彼との関連では文章の調子をとり上げるべきだろう。ニューウェル夫人がガーネットに夫を探してくれというくだりがある。発言をあいまいにとらえて、そこに展開の糸口を求めるというジェイムズ式の方法だ。

"And so you've got to find him for me, and tell him."

"Tell him what?"

"That he must come to the wedding ……." (p.62)

またガーネットが式に列席するようにニューウェルに依頼したところ、今まで自分がいなくとも無事にやれたのだから、今さら列席する必要はあるまいという。

"You're mistaken, then; if it were not for that I shouldn't have undertaken this errand."

Mr. Newell paused as he was turning away. "Not for what?" he inquired.

"The fact is, as it happens, the wedding can't be put through without your help."  
(p.75—76)

こういう進め方はまったくジェイムズ式だ。

(14) *Ibid.*

*The Pretext*. 1908 年ジェイムズは夫人に次のような手紙を書いている。Je vous le donne, je vous le donne indeed, our petite donnée, which I perfectly remember every word of our talk about, & which I applaud to the echo the fructification of in your rich intelligence! ..... I think it as beautiful & âpre (as Bourget would say of your faculty for it!) a little ironic subject as ever.<sup>(13)</sup> これで見ると、彼が夫人に話したある噂を、彼女が作品の材料として使わせてくれという依頼に対する快諾だ。これが *The Pretext* になった。彼が素材を与えたものだけに興味が深い。Mrs. Ransom はアメリカの田舎町 Wentworth に住む中年の主婦だが、ロマンティックなところがある。

She was as flat as the pattern of the wall-paper —— and so was her life. And all the people about her had the same look. Wentworth was the kind of place where husbands and wives gradually grew to resemble each other —— one or two of her friends, she remembered, had told her lately that she and Ransom were beginning to look alike ..... (pp. 130—131)

これはほほえましい描写で、ジェイムズも読んで破顔しただろう。アメリカの標準化に対する皮肉ともとれる。この地にランサムの友人にあたる Dawnish という英国青年がやってくる。ある日夫人とこの青年とが散歩していて、青年があなただけに話したいことがあるといったので、これを聞いて夫人はすっかりのぼせ上り、てっきり自分を青年の愛人ときめてしまった。夫人は青年のためいろいろつくしたから、その返礼に一つのことをしてほしいという。

“What do you want me to do?” he asked in a low tone.

“Not to tell me!” she breathed on a deep note of entreaty.

“Not to tell you ——?”

“Anything —— anything —— just to leave over ..... our friendship ..... as it has been —— as —— as a painter, if a friend asked him, might leave a picture —— not quite finished, perhaps, ..... but all the more exquisite .....” (p.150)

躊躇、どもり句調、同語の反復はジェイムズ調だ。またジェイムズの初期の短篇に *A Day of Days* (1866) というのがある。Ludlow という青年がある娘に会って興味を感じるが、遂に自分の気持をうちあけないでしまう。“It’s a very pretty little romance as it is. Why spoil it?” この心境はここのランサム夫人の心境と同じだろう。沈黙をロマンスとみる点で両者は同じだ。こうして夫人は有頂天になっていたが、実は青年は婚約している娘と別れる口実に夫人を利用していたにすぎないことがわかる。

(11) **Tales of Men and Ghosts.** Short Stories. Charles Scribner’s Sons, 1910.

10 の短篇からなっている。このうち次の 3 篇がとり上げられる。

*The Legend.* 人間が現実直視力を欠きやすいことに対する諷刺だ。これを一人の劇評家を

(13) PMLA, p. 630.

仲介させて読者に展開させるのだが、この技巧はジェイムズの *The Death of the Lion* (1895) などを思い出させる。

*The Daunt Diana*. 美術品の価値は苦心して蒐集する過程にあるという物語で、これも主人公の友人の眼をとおして眺められる。

*The Eyes*. Culwin という男が自我を満足させるごとに暗やみの中に醜く光る眼を見る。しかしそれがだれの眼かわからなかったが、最後に鏡を見たときそれが自分の眼だということがわかる。これはジェイムズの最後の超自然的短篇 *The Jolly Corner* (1909) を思い出させる。Brydon という男は若いときニューヨークを去ってヨーロッパへ渡り、23年ぶりに郷里へ帰ってくる。彼は自分がヨーロッパへ行かずにアメリカにいたらどうなっていたらどうかという病的な固定観念にとりつかれる。ある夕方だれもいないはずの自分の邸宅へ行っていたとき、そこにだれがいる。彼は恐怖におそわれたが勇気を出してそれを追ひ、玄関で対決した。それは醜い自分の分身だったという。

(12) **Ethan Frome.** Novelette, 1911.<sup>(16)</sup>

ニューイングランドの農村での三角関係の悲劇。中心になる一人称の話者を設けて、この人が数人の人から聞いた材料をまとめたという形式になっている。ジェイムズはこの話者（中央から派遣された技師ということになっている）がウォートン夫人らしくないといって笑ったという<sup>(17)</sup>が、それは彼が作者とごく親しかったからで、文学論を抜きにしてじっさいにおかしかったからだろう。さて作者はこの方法を Balzac の *La Grande Bretèche* (1832) や Browning の *The Ring and the Book* (1868—9) に負うていると緒言で述べているが、視点の統一ということを力説したジェイムズが無関係だったとは考えられない。自分の気に入った手法だったからこそ彼は最上の讃辞を送っている。

I exceedingly admire, sachez Madame, Ethan Frome. A beautiful art & tone & truth — a beautiful Right-downness, & yet effective cumulations. It's a 'gem'<sup>(18)</sup> —

(13) **The Reef.** Novel. Charles Scribner's Sons, 1912.

作者は *The Writing of Fiction* (1924) の Constructing a Novel という章で視点という問題を扱っている。万能の視点で満足していただける間はよいが、だれが出来事を見るかという問題に頭を悩ましたすと安心できなくなる。超自然ものを書くとき一視点でなければならぬ場合がある。しかし視点が一つということは視野が狭いことも意味するから、たくさんの人物が登場するとき複数の視点を使うことがある。そのときの困難を次のように述べている。

The difficulty is most often met by shifting the point of vision from one character

(16) 使用版：(i) *Ethan Frome*. With an Introduction by Bernard De Voto. Charles Scribner's Sons, 1938. (ii) *Ethan Frome*. With Introduction by the Author. Edited, with Notes, by M. Nishikawa. Kenkyusha, 1958.

(17) *A Portrait of Edith Wharton*. By Percy Lubbock. 1947. p. 67.

(18) PMLA, p. 631.

to another, in such a way as to comprehend the whole history and yet preserve the unity of impression. In the interest of this unity it is best to shift as seldom as possible, and to let the tale work itself out from not more than two, choosing as reflecting consciousness persons either in close mental and moral relation to each other, or discerning enough to estimate each other's parts in the drama, so that the latter, even viewed from different angles, always presents itself to the reader as a whole. (pp. 87—88)

Reflecting Consciousness を設定するなどはまったくジェイムズ式だ。ともかくこの作品はこういう文学論で書かれている。反射意識として Darrow と Anna との男女を選び、意識の配分をみるとだいたい折半できる。ダローはロンドン駐在のアメリカの外交官で、早くからアンナが未亡人になったので、彼女のいるフランスへ行ってみて昔の愛がよみ返る。彼女には Effie という幼女がある。今ダローは休暇をとってアンナに会いに行こうとすると彼女の方から少し待てという電報がくる。しかし待っても詳細がわからないのでフランスへ行こうとする。その途中旧知のアメリカ娘 Sophy に会う。彼女は勤めている家をとび出し、パリーで舞台に立ちたいという。ソフィーは頼る人もないところから、パリーでダローと同じ宿に泊っているうち彼と肉体交渉ができる。彼はアンナには会わないでロンドンへ引き返した。それから半年してアンナのもとへ行ってみると、意外にもソフィーがアンナのところへきていてエフィーの家庭教師をしている。めんどろなことにアンナのむすこ Owen がソフィーと恋に陥った。こういう状況のもとでアンナがダローとソフィーとの関係に気づくまでのことが、二人の意識を交互に反射させながらきめこまかに書かれる。

ジェイムズの最後の長篇を *The Golden Bowl* (1904) という。イタリーの貧乏な Prince Amerigo と、アメリカの解放された娘 Charlotte Stant とは愛し合って肉体交渉まであったが、貧乏なため正式に結婚できないでいた。一方アメリカの百万長者 Adam Verver はロマンティックな人で、娘 Maggie のために骨董品でも選ぶかのように Prince Amerigo を夫に選んでやる。マギーは母の没後一人身でいる父が淋しいだろうと思って、父にすすめてシャーロットと結婚してもらう。こうして四角関係が生れる。ここではマギーがアメリカの純真を代表している。こうみえてくるとこの図式は *The Reef* にもあてはまるようだ。つまりマギーがアメリゴとシャーロットとの関係を知らないでアメリゴと結婚するのは、アンナがダローとソフィーとの関係を知らないでダローと結婚するのに似ている。シャーロットはソフィーにあたり、バーバーはオウエンにあたるだろう。そしてアンナもマギーと同じように自分がおかれている立場を徐々に自覚するようになる。それよりもっと類似しているのは、「黄金の碗」で Prince と Princess (Maggie) との意識に配分されているように、*The Reef* でもダローとアンナとの意識に配分されていることだ。また主要人物は両作品とも海外にいるアメリカ人で、ヨーロッパが舞台になる。

ウォートン夫人はかつてジェイムズにこういったことがある。 "What was your idea in



suspending the four principal characters in 'The Golden Bowl' in the void? What sort of life did they lead when they were not watching each other, and fencing with each other? Why have you stripped them of all the *human fringes* we necessarily trail after us through life?"

これに対し彼は当惑した苦しそうな調子で“My dear —— I didn't know I did!” と答えたという。<sup>(19)</sup>つまりウォートン夫人は「黄金の碗」の諸人物は宙に浮いていて人間的感情がないというのだ。また *The Writing of Fiction* でも、先ずジェームズが視点を確立したことを称讃したのち、「黄金の碗」で不可能な完全を求めるのあまり、対等意識を拙劣に使用したことを非難している。<sup>(20)</sup>なるほど *The Reef* には「黄金の碗」ほどの真空感はない。しかし問題は人生感だ。アンナは最後にこういう人生の断面もあるのかと思ってだいたい満足する。これはジェームズの観察してしまったことで満足するのと同じではないか。これは彼の消極的な考え方で、*In the Cage* (1898), *The Sacred Fount* (1901) などでもいくらでも例証することができる。

これを要するに視点のとり方でジェームズの影響がいちじるしく、人生感で彼と酷似している。だからこの作品を彼が称讃したとしても不思議はない。

I suffer or worry a little from the fact that in the Prologue, as it were, we are admitted so much into the consciousness of the man, and that after the introduction of Anna (Anna so perfectly named), we see him almost only as she sees him —— which gives our attention a different sort of work to do; yet this is really I think but a triumph of your method, for he remains of an absolute consistent verity, showing himself in that way better perhaps than in any other, and without a false note imputable, not a shadow of one, to his manner of so projecting himself. The beauty of it is that it is, for all that it is worth, a Drama and almost, as it seems to me, of the psychologic Racinian unity, intensity and gracility.<sup>(21)</sup>

(14) **The Custom of the Country.** Novel. 1913.<sup>(22)</sup>

世紀のはじめごろから新しい女性について論じられたし、そういう女性を扱った作品が出るようになった。ウォートン夫人もおくればせながらそういう女性をここで扱った。ここに出てくる Undine という娘は徹頭徹尾物質主義者だ。アメリカの物質主義社会が生み出したそれまでの作品に前例のない恐ろしく虚栄の根なし草だ。彼女と鋭く対照させるため (*The Home of Mirth* の Lily に対する Selden のように) 内省的な Marvell をもち出した。うわべのはなやかな社会を虚偽の社会だといって妻のマーベルに警告するのだが、妻の方ではそれに見向きもし

(19) *A Backward Glance*, p. 191.

(20) p. 90.

(21) *Letters*, Dec, 9, 1912.

(22) 使用版: *The Custom of the Country*. With an Introduction by Blake Nevius. Charles Scribner's Sons. 1956.

ない。作者は彼女の行動を精神的浪費だとみる。つまりアメリカ社会に対する警告なのだ。ジェイムズも 1904 年故国を訪問して諸方を見て廻ってからアメリカの物質文化に対して警告的になった。*Crapy Cornelia* (1910) という短篇はそういう主題で、68年代のニューヨークへの懐古でもある。しかしそういう方面で夫人がジェイムズの影響を受けたとは断定できないだろう。作家だったらそういう警告を発するのは当然だろう。しかし技巧面では、上流社会の事情にくわしいマニキュリストでもありマッサージ師でもある Mrs. Heeney を仲介にして物語を展開させるあたりジェイムズを思い出させる。後半で女主人公はフランスの貴族と結婚するが、ジェイムズが興味を感じたのはここらあたりだった。次の書信は彼から夫人あての最後のものになったように思える。

But of course you know — as how should you, with your infernal keenness of perception, *not* know — that in doing your tale you had under your hand a magnificent subject, which ought to have been your main theme, and that you used it as a mere incident and then passed it by?<sup>(23)</sup>

(15) **Xingu and Other Stories.** Short Stories. Charles Scribner's Sons, 1916.

8 の短篇が収めてある。このうちの *Bunner Sisters* は裏街の姉妹のことを書いたもので、同じ視角から見られ感じられている。

(16) **Summer.** Novel. D. Appleton and Co. 1917.

ジェイムズの影響は見えない。

(17) **The Marne.** Novelette. D. Appleton and Co. 1918.

作者のフランスに対する愛情をアメリカの一青年をとおして表わしたもののだが、ここでとり上げる作品ではない。

(18) **The Age of Innocence.** Novel. 1920.<sup>(24)</sup>

1870 年代のニューヨークの上流社会が背景になる。名門の青年紳士 Archer をめぐってアメリカ娘 May と、やはりアメリカ女だがヨーロッパの貴族と結婚している Ellen とが登場する。アーチャーはメイに心を寄せているが、魅惑的なエレンに心が動かないでもない。作者はユーモラスに揶揄的に筆を進める（ジェイムズにもそういう面がある）。この作品にはジェイムズ的なところがある。先ず主題は彼がしばしばとり上げる「無邪気と経験」だ。無邪気はメイやアーチャーで表わされ、経験はヨーロッパ化した神秘的なエレンや銀行家の Beaufort で表わされている。またヨーロッパ化したものがアメリカへはいつてきてどんな反応を示すかということもジェイムズの *The Europeans* (1878) を思い出させる。そして当然のことだが彼もウォートン夫人も無邪気の方を支持する。さらにこまかい点を見ると、家系の権威 Jackson や形式の権威 Lefferts が巧みに出没するが、これらはジェイムズの *confidant* とか「紐」とかにあたるもので、その駆使力はジェイムズ以上だ。それはこういう人物の存在

(23) PMLA, p. 635.

(24) 使用版: The Modern Lib. 1948.

はこういう社会には必然的だからだ。

ジェイムズに *The Beast in the Jungle* (1903) という短篇がある。ここに出る人物は Archer と May で、偶然かもしれないが *The Age of Innocence* の人物と名が一致している。ジェイムズのアーチャーは彼を愛しているメイの愛情もわからないで、何か恐ろしいことが自分に起るのではないかとおびえていて、けっきょく何も起らなかった。ウォートン夫人のアーチャーにもこれと性格が似たところがある。彼には将来に対してたまらない不安がある。彼はメイと結婚するが、式の時にもこの不安が去らない。

“I had time to think of every horror that might possibly happen.” (p.187)

彼はメイとの結婚後もまだエレンに惹かれている。エレンのことが知りたくてある園遊会へ行ってみると、彼女がボストンへ呼び返されたのを知る。

His whole future seemed suddenly to be unrolled before him; and passing down its endless emptiness he saw the dwindling figure of a man to whom nothing was ever to happen. (P.228)

これはそっくりジェイムズ的だ。

(19) **The Glimpses of the Moon.** Novel. D. Appleton and Co. 1922.

この通俗的作品にはジェイムズの影響は少しもみえない。

(20) **A Son at the Front.** Novel. Charles Scribner's Sons, 1923.

大戦を背景にして利己心と奉仕精神との矛盾を追求したもので、ジェイムズの影響はない。

(21) **False Dawn (The 'Forties).** Novelette. D. Appleton and Co. 1924.

当時はなやかにみえたアメリカの文化も実はいつわりの黎明だったとみる。さらに皮肉なことに、一時代の情熱も物質的な後代の人によってドルに変えられるにすぎない。ややジェイムズ的な諷刺。

(22) **The Old Maid (The 'Fifties).** Novelette. D. Appleton and Co. 1924.

この作品にかぎったことではないが、アメリカの上流家庭ラルストン家に対する次のような諷刺はいくぶんジェイムズ的だ。

The first Ralston who had brought home a statue had been regarded as a wild fellow; but when it became known that the sculptor has executed several orders for the British aristocracy it was felt in the family that this too was a three per cent investment.

(23) **The Spark (The 'Sixties).** Novelette. D. Appleton and Co. 1924.

アメリカ人はある年齢以後になると文学などはわからなくなってしまうという俗物根性への諷刺。

(24) **New Year's Day (The 'Seventies).** Novelette. D. Appleton and Co. 1924.

世間の評価の眼がしばしば狂うことを諷刺する。

(25) **The Mother's Recompense.** Novel. D. Appleton and Co. 1925.

Kate はアメリカの夫のもとを愛人 Chris と手を携えて去った女で、18年後アメリカへ帰ってくる。帰米して気がついたことはアメリカの青年たちがみなのおっぺりした無表情な顔をしていることだった。ある会合に行ったときも同じような印象を受けた。

Again the sameness of the American Face encompassed her with the innocent uniformity. How many of them it seemed to take to make up a single individuality! (p.90)

これも痛烈な諷刺だ。ケイトはクリスの中に変化を認める。それは彼が redder and stouter になって昔の敏感さを失ったことだ (p. 113)。これは道徳的衰退を意味し、この道徳的衰退にケイトの娘で魅力があって同情的であり、独立心に富む Anne が離れがたい愛着を感じたというのも一つのアイロニーだ。これはあえてジェイムズやウォートン夫人をまつまでもないが、物質化し俗物化するアメリカへの警告だ。

(26) **Here and Beyond.** Short Stories. D. Appleton and Co. 1926.

6編のうち *The Temperate Zone* をとり上げることができる。登場主要人物はみなパリーへきているアメリカ人。有名な肖像画家である夫の死後再婚した女が、先夫の偉大さは実はある女流詩人の靈感のためだったことがしだいにわかる物語。これを French というアメリカの好事家が眺め、この介在者がさらに他の介在者をとおして徐々に核心に触れるという幾重もの迂回した技巧だ。介在者の一人に Lady Brankhurst がいる。

French had had the tale from Lady Brankhurst, who was an encycloædia of illustrious biographies. (p.211)

これはジェイムズ式で、彼の *The Coxon Fund* (1894) などと比べられよう。

(27) **Twilight Sleep.** Novel. D. Appleton and Co. 1927.

ジェイムズの影響は少しも見えない。

(28) **The Children.** Novel. D. Appleton and Co. 1928.

アメリカへの警告で、外向的で物質的になってゆくアメリカの両親が離婚にあけくれて子供たちがみじめになってゆくことを書いたものだ。Boyne という中年のアメリカ人が大きい介在者となって場面を眺める。彼はイタリーにいる Rose という愛人に会いに行く途中 Judith Wheater という少女に会う。この少女に会ったことをロウズに報告する。そして “Unluckily not in the least pretty.” (p.37) と書き加えた。すると彼女から次のような返信がくる。

“Of Course she’s awfully pretty, or you wouldn’t have taken so much pains to say that she’s not.” (p.38)

このあたりジェイムズの考え方を思わせる。ボインはロウズとの間にいろいろ誤解があって結婚できず、ジュディスに求婚するが、彼女からも正当に理解されないで無邪気に一笑されてしまう。Boyne felt like a man who has flundered along in the dark to the edge of a precipice. (p.310) これも Jamesian imagery だ。

(29) **Hudson River Bracketed.** Novel. D. Appleton and Co. 1929.

アメリカの伝統のない田舎の若者 Vance が、過去を吸収しながらしだいに作家としての自己を形所してゆく過程を書いたものだが、ジェイムズとは関係がない。

(30) **Certain People.** Short Stories. D. Appleton and Co. 1930.

6 短篇が収めてある。このうち *Mr. Jones* は古文書に由来する超自然現象を扱ったもので、ジェイムズの *The Third Person* を思い出させないこともないが、影響としては薄い。

(31) **The Gods Arrive.** Novel. D. Appleton and Co. 1932.

*Hudson River Bracketed* の続編と見なされるものだが、問題とするにたりない。

(32) **Human Nature.** Short Stories. D. Appleton and Co. 1933.

興味深い 5 短篇が集めてあるが、ここでとり上げられるのは *Her Son* ぐらいだろう。母親が実のむすこでもないものをむすことと思わされて——つまり幻想で幸福になりうる可能性があるという作品。アメリカの外交官が話者として登場するが、ジェイムズの *A Passionate Pilgrim* (1875) などのように、中心になる母親とはかすかの知り合いでしかないのに、いかに同国人とはいえ十数年にわたって必要以上に登場して、世話をし干渉するのはややこっけいでさえもある。

\* \* \*

以上のほか夫人の作品には短篇集 **The World Over** (1936)、同じく **Ghosts** (1937)、未完の長篇 **The Buccaneers** (1938) があるが、今回は入手できなかった。しかしこれらが加わったとて結論にあまり相違はきたさないだろうと思う。

最後にジェイムズと夫人との芸術論を比較してみたい。ジェイムズは彼の *The Art of Fiction* (1888) などで、芸術作品はけっきょく「見せかけ」だとくり返して説く。また「芸術作品のもっとも深い質は常に作者の心の質だろう。その知性の純度に比例して、小説・絵画・彫刻は美と真の本質をおびるだろう」ともいう。またこれより 17 年たって、*The Portrait of a Lady* (1881) に「序文」を書いたが、その中で、芸術作品の道德感とは主題によるのではなく、それを表現しようとする心の質によるのだ、と同様の主旨のことを述べている。

ウォートン夫人には *The Writing of Fiction* (Charles Scribner's Sons, 1925) という著作がある。この中で「見せかけ」という問題を取りあげて次のように論じているが、ジェイムズと同意見だ。Verisimilitude is the truth of art, and any convention which hinders the illusion is obviously in the wrong place. (p. 89) しかしこの著作では「立場」を考えたとき短篇が生れ、「性格」を考えたとき長篇が生れるというような議論が多くて、ジェイムズの芸術論と比べられる部分が少ない。ただ Marcel Proust の *A la Recherche du Temps Perdu* を論じた部分で、だいたいプルーストを称賛した後、彼に moral sensibility がないといって非難している。しかしこれだけでは明らかでない。Blake Nevius は Yale 図書館所蔵のウォートン夫人の手になる未発表の *Fiction and Criticism* という文書を発表していて、夫

人がジェイムズと同主旨のことを述べているといっている。<sup>25)</sup>

The ultimate value of every work of art lies, not in its subject, but in the way in which that subject is seen, felt, and interpreted.

しかしジェイムズと夫人とは社会的地位、教養、進路ともほとんど同じで、同じ時代の空気を呼吸した。そういう二人が同じような芸術論や文学論をいだいたとしても少しも不思議ではない。こういう一般論に関するかぎり、夫人がジェイムズの芸術論から大きい影響を受けたとみるのは速断かもしれない。これはアメリカ対ヨーロッパの問題についてもいえるだろう。また女性を未亡人としてとらえるのも二人に共通で、しかもとらえかたが機械的なのも二人に共通だ。

ウォートン夫人にいちじるしい文学的影響を与えたのはジェイムズだけではない。George Eliot もその一人だ。<sup>26)</sup> ジェイムズも夫人の作品がエリオット式だとよく指摘した。しかし今ジェイムズだけの影響を考えると、今までみてきたようにいちじるしい影響のあとが見えるのは *The Reef* (1912) ないし *The Age of Innocence* (1920) ごろまでだ。それをこまかくみると、初期のころでは次の点が目だつ。

- |   |         |                       |
|---|---------|-----------------------|
| I | { 技巧的方面 | (1) 介在者や観察者をおく間接法     |
|   |         | (2) 心像（危険感に関するもの）     |
|   |         | (3) ためらい、くり返し、調子などの文体 |
|   |         | (4) 発想法や展開の仕方         |
|   | { 内容的方面 | (1) 素材の選び方            |
|   |         | (2) ある契機によるより高い次元への覚醒 |
|   |         | (3) 意識過剰              |
|   |         | (4) 超自然界への好み          |

これが *The Reef* ないし *The Age of Innocence* に近づくにつれて次の点が目だつ。

- |    |         |                   |
|----|---------|-------------------|
| II | { 技巧的方面 | (1) 視点のとり方        |
|    |         | (2) 介在者や観察者をおく間接法 |
|    | { 内容的方面 | (1) 人生観           |
|    |         | (2) アメリカ対ヨーロッパの問題 |
|    |         | (3) アメリカの物質化への警告  |
|    |         | (4) 超自然界への好み      |

つまり影響する方面が内容方面へ移っている。それは夫人がジェイムズの技巧をある程度消化してしまったことと、夫人が作家として成長したことを物語るものだろう。夫人が創作を

<sup>25)</sup> *Edith Wharton: A Study of her Fiction.* p. 33.

<sup>26)</sup> *Edith Wharton: Convention and Morality in the Work of a Novelist.* By Marilyn Jones Lyde. 1959. p. 26.

発表したのは1889年で、それはソネットの *Happiness* だったという<sup>(27)</sup>。そして没したのは1937年だから創作期間は約50年だ。だからこのうち約30年はジェームズの影響下にあったといえる。以上は類似点をあげたのだが、二人の間で類似していない点もある。それは夫人の方が考え方がより間接的でなく、彼ほど点視を強要せず、文体は明快なことだ。

今まで夫人の作品の優劣を述べる機会がなかったので、ここで一言しておく。しかしこれは批評家の間でだいたいきまっていることで、*Ethan Frome* はこれからも読まれるだろうが、何といても *The House of Mirth* と *The Age of Innocence* とが彼女の二大傑作だ<sup>(28)</sup>。私もそのとおりだと思う。特に *The Age of Innocence* は興味深く読んだ。やや中だるみの感じがしたが、終末ごろになっての文の勢いというものにはただただ引きずりこまれるにすぎなかったというほかはない。この二大作に *False Dawn*, *The Old Maid* などのいくつかの短篇がつけ加えられるだろう。なぜ *The Age of Innocence* あたりが境界線になったかということはジェームズとはあまり関係がないようで、ここではなくて別な場所で論じるべき問題だと思う。また夫人が彼の影響を受けてはたしてプラスだったかどうかの問題も残る。しかしこれは素質や天分ともからみ合っているのですこぶる困難な問題だ。だが彼の影響下にあったとき代表的傑作が生れ、それ以後は短篇のいくつかは例外として作品価値がしだいに低下していったということは、いくぶん考慮に入れてもよからう。ただし上述したように別に述べるべきことがらだ。

これを要するにジェームズのウォートン夫人への影響は技巧的方面からしだいに内容的方面へ移り、*The Reef* ないし *The Age of Innocence* が頂点で、それからしだいに衰退を示した。あるいは偶然だとも思うが、だいたいジェームズが他界した1916年ごろが頂点だったといってもよい。または第一次大戦終末ごろまでといってもよからう。ジェームズは「滋養になる人間的空気が稀薄な」世界へ昇っていったのに、それからの夫人は彼とは別の世界へは行っていった。

(27) *Edith Wharton*. By Robert Morss Lovett. 1925. p. 8.

(28) その一例に最近の次の書がある。

*Edith Wharton*. By Louis Auchincloss. (University of Minnesota Pamphlets on American Writers, No. 12) 1961. p. 42.

Carl Van Doren は *The American Novel* (1939) で、Mrs. Wharton は *The Age of Innocence* 以後は彼女の小説体系に加えられるものはほとんど書かなかったという。